保育者養成における感性や表現する力の育成

～ミュージカル制作を通して～

深　谷　悠里絵　　磯　部　哲　夫　　横　溝　聡　子

（令和４年３月）

郡山女子大学紀要　第 58 集別冊

（Vol.58）PP.147 ～ 162

郡山女子大学　郡山市開成３丁目 25 番２号

原著論文

保育者養成における感性や表現する力の育成
～ミュージカル制作を通して～

Fostering sensibilities and ability to express in the training of childcare workers
~ Through musical production~

深　谷　悠里絵※　　磯　部　哲　夫※　　横　溝　聡　子※
Yurie Fukaya　　Tetsuo Isobe　　Toshiko Yokomizo

In this study, in relation to musicals in the kindergarten education guidelines "expression", we dealt with them during class from eight perspectives: (1) words, (2) singing expressions, (3) musical instrument performance, (4) physical expression, (5) performing arts, (6) lighting, (7) direction, and (8) planning and communication skills. We will summarize the contents and consider them. By summarizing the activities and verifying the content in connection with the area of "expression" in the educational guidelines, the musical.

はじめに

本研究は、卒業研究「ミュージカル」を題材として、幼稚園教育要領（以下、教育要領とする）「表現」の領域との関連を明らかにする。卒業研究は、本学２年生全員が履修することになっており、音楽・ミュージカル・子どもの心理・福祉・造形・運動・自然保育等の 12 のテーマに分かれて、学生が興味を持った内容のグループを選択し、１年間研究をしていく。尚、チャイルド・ミュージックコースの学生は全員が「ミュージカル」を選択する。

筆者らが担当するミュージカルのグループでは、演目「ピノキオ」を創作することとなり、台本制作や曲のアレンジ・作曲・振付等、様々なテーマをもって研究を進めた。その中で、①言葉②歌唱表現③楽器演奏④身体表現⑤舞台美術⑥照明⑦演出⑧企画力・コミュニケーション能力の８つの観点から授業中に取り扱った内容をまとめ、考察していく。

以下、教育要領「表現」の内容について記載する。

内容（1）　生活の中で様々な音、形、色、手触り、動きなどに気付いたり、感じたりするなどして楽しむ。

（2）　生活の中で美しいものや心を動かす出来事に触れ、イメージを豊かにする。

（3）　様々な出来事の中で、感動したことを伝え合う楽しさを味わう。

（4）　感じたこと、考えたことなどを音や動きなどで表現したり、自由にかいたり、つ

※幼児教育学科

くったりなどする。

(5) いろいろな素材に親しみ、工夫して遊ぶ。

(6) 音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりなどする楽しさを味わう。

(7) かいたり、つくったりすることを楽しみ、遊びに使ったり、飾ったりなどする。

(8) 自分のイメージを動きや言葉などで表現したり、演じて遊んだりするなどの楽しさを味わう。

研究の背景

チャイルド・ミュージックコースは、令和元年度入学の学生が1期生となり、卒業研究を全員がミュージカルを選択し、研究していく初めての学年だった。教員も学生も初めての取り組みということもあり、試行錯誤の連続だったが、更にコロナウイルス感染症防止対策を講じながらの授業展開となった。チャイルド・ミュージックコースの他、幼児教育コースで「ミュージカル」を選択した学生も加わり、計29名で活動することとなった。

教育要領「表現」の領域に関連付けていくことで、ミュージカルを創作し、「表現」について自発的に学んでいけること、身につけられることがたくさんあることに気づいた。また、感染防止対策が必須となったことで、様々な制限があったが、代替策を考えたり、発表の形態をICTの技術を駆使して工夫するなど、困難を乗り越えていく学生の姿勢が見受けられ、より感動を与える作品となった。

ミュージカルの先行研究は、実践報告がほとんどで、福井・太田垣(1998)は「ミュージカル教育は、より深いより厚みのある人間関係を構築し、創作していく過程で仲間との心のきずなが深まっていく」[1)]と教育的意義について述べている。しかし、実際に幼稚園や保育園の現場での教育とどのように結びついていくのか。教育要領と関連していることが意識付けできることで、幼児教育の現場で指導していくことや表現していくことの楽しさに繋がり、表現の幅も広がっていくのではないだろうか。そのことを踏まえて、本研究では活動のまとめと共に、教育要領「表現」の領域との内容と結びつけた検証を行っていくことにより、ミュージカルの教育的意義を明らかにしていきたい。

言葉

ミュージカルを制作するにあたって、まず、題材を決めるところから始まった。子どもたちに見せることを前提とし、著作権のことも考えながら子どもたちが知っている物語の候補をいくつか挙げ、その中から令和2年度の卒業研究におけるミュージカルは『ピノキオ』に決定した。卒業研究発表の時間は20分間と決められており、その時間内に収まるよう台本制作に取

りかかった。コロナ感染症の広がりにより対面授業が始まったのが６月からであり、制作時間が限られることから、音楽は既成のピアノ・ヴォーカルスコアを使用した。しかし、楽譜の歌詞は英語だったため、日本語の歌詞を全て自分たちで考えることになった。全体のシーンの流れを考えた選曲に合わせて、台本と歌詞制作は、台本班、歌詞班に分かれて同時進行で行われた。

台本制作では、まずこの物語を通して子どもたちにどんなメッセージを伝えるか、また、子どもたちを物語に引き込むための方法なども考えた。台詞を考える上で重要なことは、一つ一つの言葉が子どもたちに理解しやすいこと、更に短い台詞の中でも効率的に様々なことが的確に伝わる言葉選びである。ストーリーの展開と共に、登場人物の性格や心情も表現できる言葉選びに学生たちは時間をかけて検討し、演技の練習が進んでからも台本の手直しが度々行われていった。

歌詞の制作は、初めに音楽が出来上がっていたため、そのメロディーやリズムに言葉をはめ込む作業になった。歌詞制作では、ストーリーを展開しつつそれぞれの登場人物に合った歌詞を付けることが必要である。また、メロディーやリズムと言葉のイントネーションが一致すること、限られた音数の中に表現したい言葉を選択し、語順を考え、歌い易く且つ理解しやすい歌詞にすることが求められる。学生たちは豊かな創造力で良いアイディアを出したが、音楽的な知識もかなり必要な作業であり、難しい曲はチャイルド・ミュージックコースの学生が仕上げを行った。

台本や歌詞が完成の後、歌や台詞、演技の練習段階へと進んだ。始めの段階での問題点は、台詞の抑揚が無く一本調子であること、前の人の台詞とトーンが同じになってしまうこと、テンポが一定であることなどが挙げられる。役のキャラクターや場面によって声のトーンや言葉のスピードが変わるはずである。また、台詞一つ一つがどうしてその言葉になるのか、前の場面からの繋がりや役の心情を深く考えることが大切である。それらを意識しながら言葉に込められたものの意味が理解できるようになると、自分の言葉として発せられるようになり、台詞も自然で説得力のある表現が生まれてくる。学生たち全員練習を積むに従ってはっきり通る声と言葉の表現力を身につけていった。特にゼペット役の学生は指導者から色々指摘され、かなり悩み落ち込んだ様子であったが、一週間後には別人のように表現が変化し、心を揺さぶられる感動的な演技ができるようになっていた。学生自身が感じ、深く考えた成果が自己表現として演技に現われたと言えるだろう。

【考察】

学生たちは班ごとに話し合いを進めながら、既成のストーリーを踏襲しつつも自分たちのオリジナルミュージカルの台本や歌詞を制作していく過程で、初めはなかなか意見を出せなかっ

た学生も積極的に発言できるようになっていった。また、研究発表直前までそれぞれのシーンのイメージや台詞、演技に対しての意見が活発に出され、それに対する改良が加えられていった。このミュージカル制作を通して互いに率直な意見を出し合える人間関係が構築できたことや人の意見を受け止め共感できる姿勢ができたこと、イメージや感動を共有できるようになったことが大きな収穫である。教育要領「表現」[内容] (2)「生活の中で美しいものや心を動かす出来事に触れ、イメージを豊かにする」の部分に「教師が幼児の感じている心の動きを受け止め、共感することが大切である。そのためには柔軟な姿勢で一人一人の幼児と接し、教師自身も豊かな感性を持っていることが重要である。」や、(3)「様々な出来事の中で、感動したことを伝え合う楽しさを味わう。」の部分「教師はそれを受容し、共感をもって受け止めることが大切である。更にそのことを教師が仲立ちとなって周りの幼児に伝えながら、その幼児の感動を皆で共有することや伝え合うことの喜びを十分に味わえるようにしていくことが必要である。」とある。また、(8)「自分のイメージを動きや言葉などで表現したり、演じて遊んだりするなどの楽しさを味わう」とある。学生がまず自ら体験していくことにより、子どもたちの姿に共感を持って接することができるようになるであろう。

ミュージカル制作を通して、登場人物の性格や場面を表現するために言葉が持つ意味やニュアンスまで考えることが大切であるとの認識を深めたが、これらのことは、「表現」に留まらず、教育要領「言葉」の領域とも大きく関係している。教育要領「言葉」[内容] (2) では、「教師が的確にその思いを言葉で表現していくことによって、幼児が表現しようとする内容をどう表現すれば良いかを理解させていくことも大切になる。」や (7)「生活の中で言葉の楽しさや美しさに気付く」では「教師の話す言葉に耳を傾けることにより、言葉の響きや内容に美しさを感じ、改めて言葉の世界の魅力にひかれることもある。さらに、同じ意味を表す言葉であっても、その表現の仕方を変化させることが必要な場合もある。」とある。このように保育者自身が言葉による表現力を持っていることが大切であると言えよう。ミュージカル制作により、伝える言葉や伝わる言葉を選択する力、そしてその言葉を伝える力、豊かなイメージや人の心の動きを受け止め共感する力、互いに言葉を通して伝える力、感動を共有する態度などが養われていくと考える。

歌唱表現

平成 30 年度の拙著「保育者養成課程における歌唱に関する研究」～女性の地声と裏声の発声法と歌唱法～の中で、歌唱における呼吸法、地声と裏声のそれぞれの発声法、地声と裏語を織り交ぜた歌唱法を考察し、地声と裏声の換声点を認識し、換声点で声区転換をして歌唱する歌唱法について、84% の学生が歌唱効果を実感しており、女子学生の保育者養成課程における歌唱分野においての指導法として意義があるという考察を行った。この研究を基に、ミュージ

カルの歌唱表現について検証する。

＜歌唱呼吸の習得＞

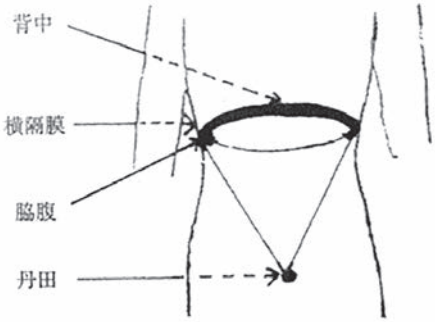
歌唱呼吸修得の中期段階　①膝を曲げて下方へ強めに息を吸う
②椅子に座って背筋を伸ばし下方へ強めに息を吸う
③歩きながら下方へ強めに息を吸う

ミュージカルの卒業研究を選択した学生は、大半が腹式呼吸を理解しているので、上記に示した歌唱呼吸修得の中期段階から始めた。生活の中で何気なく行える、膝曲げ、着席、歩行の動作であるが、この動作は図１のように横隔膜が前後左右に広がり、声の支えが作れるようになり、フレージングが安定し、フレシキブルな歌唱表現が可能となる。

○地声と裏声を使った歌唱法

地声と裏声を使い分けるには、学生自身が自分の換声点を把握することが重要である。自分の換声点を把握し、換声点を境に地声と裏声の声区転換をしながら歌っていくのであるが、地声と裏声の各声区には重複する部分が存在する。実際に楽曲を歌う場合には、上・下行音型の順次進行、上・下行音型の跳躍進行が繰り返されるが、こういった音型進行が低・中・高音域の同一音域内あるいは異なる音域内で行われることにより、声区の重複部分が多様に変わってきてしまうのである。換声点は声区転換の目安として考え、低・中・高音域の同一音域内あるいは異なる音域での、音型進行による地声と裏声の歌唱法を次に示してみる。なお各音域については個人差があるので、音名による音域の限定はしないこととする。

図１　横隔膜を広げるイメージ[2)]



【音型進行による地声と裏声の歌唱法[3)]】

①低音域内、低音域から中音域、中音域内での上行音型の順次進行の場合は、地声の声区が強くなるので換声点を超えても地声で歌唱する。

②中音域から高音域にかけての上行音型の順次進行の場合は、換声点で声区転換をして歌唱する。

③低音域内、中音域から低音域にかけての下行音型の順次進行の場合は、地声での声区が強くなるので地声で歌唱する。

④中音域内、高音域から中音域にかけての下行音型の順次進行の場合は、裏声の声区が強くなるので裏声で歌唱する。

⑤高音域内での上行･下行音型の順次進行の場合は、裏声の声区が強くなるので裏声で歌唱する。
⑥低音域内での跳躍進行の場合は、地声での声区が強くなるので地声で歌唱する。
⑦低音域から中音域、中音域から低音域にかけて、または中音域内の換声点を超えない跳躍進行の場合は、地声での声区が強くなるので地声で歌唱する。
⑧低音域から中音域、中音域から低音域にかけて、または中音域内の換声点を超えた跳躍進行の場合は、換声点で声区転換をして低音域は地声、中音域は裏声で歌唱する。
⑨低音域から高音域、高音域から低音域にかけての跳躍進行は、換声点で声区転換をして低音域は地声、高音域は裏声で歌唱する。
⑩中音域から高音域、高音域から中音域にかけて、または高音域内の跳躍進行は、裏声の声区が強くなるので裏声で歌唱する。

以上 10 項目が地声と裏声を使った歌唱のポイントである。ミュージカルにおいては、歌唱呼吸を修得し、地声と裏声を使い分け、ドラマティックな歌唱表現が可能となった。

【考察】

このようにミュージカルにおける歌唱表現は、教育要領の領域「表現」の内容の（6）「音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりなどする楽しさを味わう。」について、保育者を目指す学生の歌唱技術や表現力を向上させ、幼児の前で表現豊かに模範唱ができるということは、幼児が音楽に親しむようになる上で重要な経験となるといえよう。

今後の課題としては、歌唱分野は個人差があるという現状を踏まえ、限られた授業時間という中で、マンツーマンのヴォイストレーニングの時間や回数を増やし学修効果を上げてくことであろう。どうしても短時間でのマンツーマンのヴォイストレーニングとなってしまうので、今回の考察を基に、より効果的なトレーニング法を検証しなければならない。

楽器演奏

ミュージカルは音楽が重要な役割を果たしている。歌だけでなく、歌を支える伴奏や BGM はミュージカル全体の雰囲気を支配している。ストーリーを進めて役のキャラクターや気分の変化を表現し、場面の転換もしていく。今回のミュージカル制作では、音源は使用せずに生演奏（実際には録音をして使用した）することに拘り、チャイルド・ミュージックコースの学生が伴奏の楽器演奏を担当した。楽譜は既成のピアノ･ヴォーカルスコアから一部を使用したが、学生の専攻に合わせてアレンジを加えた。音源からの聴音を学生にも行わせ、また、足りない部分やパートを創作することも行った。20 分間という研究発表の時間に収めるために曲のカットやアレンジも必要であった。アレンジ楽譜は楽譜制作ソフトを使用し作成した。これによって移調楽器への対応や、歌う学生の声域に合わせた移調などが容易にできた。この作業を通し

て、学生たちにソルフェージュ能力の向上と共に、現場ですぐに活用できる楽譜制作ソフトの使用方法を身につけさせることができたと考える。普段なかなか取り組むことができない多様な楽器とのアンサンブルや即興的な打楽器の使用、場面に合わせた効果音を考え演奏することなど通して、学生たちは演奏することの楽しさを体感している様子であった。更に、クラシック音楽とは違ったジャンルの音楽に触れることで、新たな表現力を身につけることができた。

【考察】

チャイルド・ミュージックコースの学生達は幼児曲も勉強しているが、普段はそれぞれの専攻におけるソロの器楽作品を中心に学んでいることが多い。標題音楽よりも絶対音楽的な表現法の追求の方が主となりがちである。ミュージカルにおける伴奏音楽は、場面の雰囲気や役のキャラクターを考える必要がある。音楽で心情を表現し、場を盛り上げ、ストーリーを進める推進力となっていく。また、楽器同士だけでなく歌い手との呼吸も合わせる必要がある。アンサンブル演奏は互いの表現を受け止めながら、自己表現をしていくことである。学生たちは、どのように表現したらその場面に相応しいか深く考えながら練習を積み重ね、演奏技術だけでなく、自発的な表現力も向上させることができた。

教育要領「表現」(4) では「感じたこと、考えたことなどを音や動きで表現したり」とある。ここでは幼児の自分なりの表現について教師が受けとめながら、幼児が表現する喜びを味わえるようにすることが大切ということであるが、教師自らがまず自分が感じたことを表現できることが重要であろう。楽器演奏を通して自己表現をする力を身につけ、そこから得る喜びを知ることや、他者とのアンサンブルは、人の表現を受け止める力も同時に培われていく。また、(6)「音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりする楽しさを味わう。」では、「教師などの大人が、歌を歌ったり楽器の演奏を楽しんだりしている姿に触れることは、幼児が音楽に親しむようになるうえで、重要な経験である。」とあるように、楽しんで音楽を演奏する経験を積んでおくことが、幼児に大きな影響を与えることになるであろう。ミュージカル制作において、より豊かな表現力を身につけておくことは大きな意義があると考える。また、今回のアレンジでは、幼児教育の現場で活用されているトライアングルやタンバリンなどリズム楽器も意識的に用いた。単純なリズム楽器をミュージカル音楽に効果的に用いる経験を通して、その楽器の持つ表現方法を見出すこともできたと考える。幼児が音楽活動において豊かな表現を工夫して創り上げる楽しさを味わえるようになるために、学生がまずその楽しさを知っておくことが必要であり、ミュージカル制作では、その学びに結びついているのである。

身体表現

ミュージカルにおいて感情の表出を行うには、ダンスや身振り手振りを伴った身体表現が重

要な要素である。ダンスは、登場人物の感情の表出、ストーリーや内容を伝える典型的な身体表現である。対話シーンや歌唱シーンでの身振り手振りを伴った身体表現は、感情、言葉や旋律が聴き手に十分に伝わるための手法といえる。本項では、ミュージカルでの「対話シーン」と「歌唱シーン」において、身振り手振りを伴った身体表現の修得を検証する。

＜対話シーンでの身体表現の修得＞

劇中、台詞を対話で進行するシーンにおいて、複数人の間合いの取り方が重要となってくる。良い間合いの取り方をすることで、対話に説得性を持たせ、自然な感情の表出が可能となり、感情を伴った身振り手振りの身体表現が行えるようになる。相手との絶妙な間合いを取る練習として、下記のような授業内容を実践した。

・３つのグループに分かれる。
・全員で普通にジャンプする。
・全員で静かにジャンプする。
・全員で後ろ向きにジャンプする。
・全員で目を閉じてジャンプする。
・目を閉じてグループごとに合図を決めてジャンプする。
・目を閉じてグループごとに合図を出さないでジャンプする。
・目を開いてグループごとに合図を出さないでジャンプする。

このトレーニングは、初めは全員でバリエーションを加えジャンプし、次にグループごとに目を閉じて合図を決めてジャンプしていき、最後に目を開いてグループごとに合図を出さないで、間合いを感じながらジャンプをするというものである。これは、グループ内でお互いを意識しながら言葉を発せずに、絶妙な間合いを取っていくというトレーニングである。こうしたトレーニングを実践し、間合いの取り方を養うことで、対話シーンにおいて自然な流れができ、感情を伴った自然な身振り手振りの身体表現か可能となった。

＜歌唱シーンでの身体表現の修得＞

歌唱においても身体表現を伴うことで、声や歌詞を人に伝えようとする説得性が向上する。井中（2011）は身体表現と音楽の関わりについて、「身体の動き」は「音」のイメージによって表現をより豊かなものとし、「音楽表現」は「動き」を感じることにより、より明確なものとなったと述べている[4)]。本研究では歌唱と身体表現とのかかわりに関して、次のような実践を試みた。

①童謡を使った身体表現

今まで歌唱時において身体表現を伴うことが無かった学生に対し、実際に「たなばたさま」「犬のおまわりさん」「南の島のハメハメハ大王」「小さな世界」等の童謡を取り上げ、基本的

な身体表現を実践した。伊藤ら（2014）は、「科目の授業内容とオペレッタ制作での必要事項との関連性」において「総合表現Ⅰ・Ⅱ」の科目の「身体」について、「気持ちを伝える動き」「気持ちを伝える表情」「役柄の個性を表す動作」「ダンス」の授業内容のポイントを述べている[5)]。「身体」におけるこれらのポイントの中で、歌唱と身体表現を結びつける「気持ちを伝える動き」「気持ちを伝える表情」「役柄の個性を表す動作」の３つを評価項目として、童謡における身体表現の実践を検証した。

②童謡を使った身体表現の実践

「気持ちを伝える動き」

・各自歌詞に対して、手、足、首等、身体全体を使った身体表現を考える。

・実際に歌いながら、手、足、首等、身体全体を使った身体表現を行う。

・身体表現について、教員とディスカッションし考察する。

・再度歌いながら考察した身体表現を行う。

・鏡で体の動きを映しながら、再度身体表現をチェックする。

「気持ちを伝える表情」「役柄の個性を表す動作」

・体の動きが完成したら、歌詞の中の主人公の気持ちになりながら顔の表情を付けていく。

以上のように、童謡を使った身体表現の実践においては、「気持ちを伝える動き」「気持ちを伝える表情」「役柄の個性を表す動作」という評価項目をチェックし、歌唱と身体表現の基礎を修得することができた。これらの歌唱と身体表現を基本とし、今回取り上げたミュージカル「ピノキオ」の歌唱楽曲に３つの評価項目を取り入れ、歌唱と身体表現を結びつけて歌唱シーンでの身体表現を修得した。

【考察】

身体表現について、「対話シーン」と「歌唱シーン」においての関連性を論じたが、基本的に身体表現は言葉以外で何かを伝えるノンバーバル・コミュニケーションであり、そのような要素を帯びた身体表現に、「対話」や「歌唱」のバーバル・コミュニケーションが加わることで感情表現がしやすくなり、人に伝えようとする説得性が向上するのである。

このようにミュージカルにおける身体表現は、教育要領の領域「表現」の内容の（4）「感じたこと、考えたことなどを音や動きなどで表現したり、自由にかいたり、つくったりなどする。」及び（8）「自分のイメージを動きや言葉などで表現したり、演じて遊んだりするなどの楽しさを味わう。」について、幼児におけるバーバル・コミュニケーション、ノンバーバル・コミュニケーションを理解し、幼児の素朴な表現を大切にして、幼児が何に心を動かし、何を表そうとしているのかを受け止める感覚を養成できる授業内容であるといえる。

舞台美術

学生は台本で、舞台の場面展開を５つ創った。①おもちゃ屋さん②サーカスの風景③プレジャーアイランド④クジラのお腹（映像）⑤星空エンディング（映像）である。①では、積み木やプレゼントの箱、おもちゃが並んでいる商品棚、風船の装飾を段ボールや画用紙、ペンキや油性マジックなどを使って創作した。②では、舞台転換を効率よく行うため、舞台上から吊り下げる方法で、三角の旗を紅白の布で作成し、背景に使用した。③では、①②の明るい配色から暗い黒を基調とした配色へと場面転換が行われた。黒い壁に落書きされた背景、無造作に配置された段ボールで作られた木の箱。ここでもペンキや画用紙などを工夫しながら場面に合った装飾が作られた。④では、クジラのお腹の中にいる場面だったので、ICT の技術を使って表現した。⑤でも同様に、映像で表現した。カーテンコールも含めたエンディングを、ストーリーの全体を締めくくるイメージが学生の中で星空ということもあり、このような舞台美術となった。

限られた時間と予算の中で、場面の転換を効率よく行うにはどのような表現ができるか、大道具・小道具チームを中心に、授業の空きコマなどを利用して全員で作成した。最後まで苦戦していたのは、①の場面の商品棚と③の場面の落書きされた背景に使用した段ボールの出し入れと、立たせる方法だった。舞台で映えるように作ったため、大きさも重さも思った以上のものが出来上がり、工夫が必要となった。

【考察】

今回、学生はストーリーから想像し、場面に合った舞台美術を創作していったが、これまで自分たちが感動した体験や見てきた景色、映像や写真などから得たヒントを基に、自分たちなりにイメージしたものを表現することが必要だったといえる。これは、教育要領「表現」内容(5)「いろいろな素材に親しみ、工夫して遊ぶ。」や (7)「かいたり、つくったりすることを楽しみ、遊びに使ったり、飾ったりする。」に該当してくる。形や色などの変化、組み合わせを工夫して活動していくことで、多様な体験に繋がり、表現する意欲や想像力を育む上で重要となってくると考える。子どもの視点に立ち、その子どもがそれらに抱いているイメージを受け止めることも大切である。様々なものを制作していく中で、学生一人一人のイメージに違いがあったが、話し合いの時間を設けながら、学生同士で否定すること無く、様々な意見を取り入れながら形にしていく姿が多く見受けられた。保育の現場でも教師の意見だけでまとめることなく、子どもたちのイメージを大切にしながら進めていくことが、子どもの自発性や創造性を育む大きなきっかけとなるだろう。

照明

照明を担当したのは、29名のメンバーのうち３人である。１人は舞台のホリゾントライトを中心に、背景に合わせた配色を考え、場面ごとの色を作っていった。残りの２人はピンスポットを担当し、場面に合わせて効果的に光を使い分けていた。ホリゾントライトについては、背景の色は場面ごとに７つ設定した。上下に分けて２色をグラデーションにした背景（黄色から水色、ピンクから紫など）、全体に色を混ぜ淡い印象の背景、単色の背景（赤や青）など舞台で練習する時間は限られていたものの、リハーサルができる時間を有効に使い、スマートフォンで録画したものを全員で共有し、みんなの意見を取り入れながら工夫をしていった。明るさや暗さ、楽しい、悲しいなど舞台の雰囲気創りをする大事な要素となった。

【考察】

全体の印象を良くも悪くも変えてしまう大事な照明は、舞台監督や演者とのやり取りから、様々な種類の色を作り出し、みんなが納得いく配色にしていくことができた。幼稚園教育要領「表現」内容（1）「生活の中で様々な音、形、色、手触り、動きなどに気づいたり、感じたりするなどして楽しむ。」（2）「生活の中で美しいものや心を動かす出来事に触れ、イメージを豊かにする。」や（3）「様々な出来事の中で、感動したことを伝え合う楽しさを味わう。」（4）「感じたこと、考えたことなどを音や動きなどで表現したり、自由にかいたり、つくったりなどする。」（7）「かいたり、つくったりすることを楽しみ、遊びに使ったり、かざったりなどする。」（8）「自分のイメージを動きや言葉などで表現したり、演じて遊んだりするなどの楽しさを味わう。」とある。また「～（略）イメージの世界を十分に楽しめるように、イメージを表現するための道具や用具、素材を用意し、幼児と共に環境を構成していくことが大切である。」と取り上げられている。台本からイメージしたことを照明で創り出し、照明で創り出した雰囲気を、演者は感じ取って自由に表現する。幼稚園や保育園でも子どもたちの素朴なイメージや表現を大切にして、自由に自分の思いを表したり、伝え合ったりしていく環境をつくる必要がある。また、演じていくことだけではなく、日常生活の遊びの中で、発見する形や色について、工夫していくことで自分のイメージしている物を作ることや表現することができる。それらを友達や先生に見てもらうことで、お互いに作品への思いを高め、表現する楽しさ、感動を共有できる時間は心の成長を育み、目標に向かっていく力へとつながっていくと考える。

演出

卒業研究でミュージカルを選択して集まった学生のほとんどが、演じるのも踊るのも初めてだった。その中で、元々題材はある作品とは言え、制限時間内に収めるため自分たちで脚本を考え、演出まで創り上げていく。はじめは演じることに恥ずかしさや躊躇いなどがあったが、

エチュード（起承転結の場面づくり）やグループワークを通じて、少しずつ演じる基本を学んでいった。脚本が出来上がってからは、台詞や背景、音楽に合わせてどんな表情が必要か、どんな声が合っているか、オーディションで選ばれた学生がそれぞれ模索していった。演じているつもりでも、大きな舞台で子どもたちに伝える演技には、顔や声の表情、身体表現など様々な工夫が必要となった。更に、コロナ感染防止のため、マスク着用での演技だったため、表情が伝わりにくく、声もこもって聞こえてしまうなどの難しさもあり、通常では必要のない点も留意することとなった。また、チャイルド・ミュージックコースが作詞・作曲をした曲でオリジナルダンスを振付、29 名全員で踊る場面では、舞台映えする隊形を舞台監督中心に考え、曲のタイミングで動きを付け加えるなど、視覚的に楽しんでもらうためにはどのような工夫が必要なのか試行錯誤していた。全体の動き、振りの関係から、曲の後奏部分のカットや伴奏のアレンジなど、演奏チームと何度も話し合いを重ね、納得いく形を模索していった。

【考察】

劇中の動きやダンスの振り付けは、その役についた学生が練習を重ね、リハーサルで友達や教員のアドバイスを通して、別の表現を加えたり変更して完成させていった。なかなかイメージしていることが演技で表現できずに苦しむ場面もあったが、繰り返し演じていくことで自分のものにしていき、自然な表現が生み出されていった。

ミュージカル最後のカーテンコールやオリジナルソングでの隊形は、ダンス講師に決めてもらうことなく、学生同士の話し合いで創り上げた。何列にするか、高さの変化、隊形移動はどのように行うか、曲と動きをどのようにリンクさせるか、考えることは多々あったが、動画で残す際も全員の顔が見られるように、隊形の面白さと美しさ、演出としてどちらの視点からも考えていくこととなった。舞台監督は、ダンスが初めての学生にもわかるように、花が開くように、階段のようになど、みんながわかりやすい指示をだすよう工夫していた。

幼稚園教育要領「表現」内容 (8)「自分のイメージを動きや言葉などで表現したり、演じて遊んだりするなどの楽しさを味わう。」とあるように、完成形や目指していくものを言葉で伝え、それに向かって練習し、演じる楽しさを感じていく流れとなった。子どものイメージを表現できるよう、道具や用具、素材を用意し、子どもと共に環境を整えていくことも大切になってくるだろう。また、「物語を聴いてその登場人物に対するあこがれの気持ちからごっこ遊びを楽しんだり、自分たちの物語を作って演じたりする。一人一人の発想や素朴な表現を共感をもって受け止めることが大切である。共感する教師や他の幼児がそばにいることにより、幼児は安心し、その幼児自身の動きや言葉で表現することを楽しむようになる。」と幼稚園教育要領解説でも述べられているように、ミュージカル制作を通じて、子どもの感性と表現する力を養い、創造性を豊かにしていける「表現」の領域に直接関連して力を育んでいけると考える。

企画力・コミュニケーション能力

まず台本班と歌詞班に分かれて制作に取り掛かり、配役決定後の演技練習に入ってからは、キャストと音響、照明、演奏などのスタッフに分かれ、卒業研究のリーダー、副リーダー、各スタッフのリーダー、舞台監督らが中心となって練習スケジュールなどの計画をたてた。コロナの感染予防対策も学生たち自らが考えて練習に臨み、ステージ上での近距離での発声を避けるために、楽器演奏、歌、台詞は全て録音を行った。録音はパソコンを使用し、楽器演奏、歌、台詞の順に音を重ねる作業となった。音響担当者は録音のスケジュールを決め、録音準備、録音、ミキシング、舞台音響のオペレーターの役割を担った。照明担当者は場面毎のステージのイメージから照明のプランニングをし、セッティングと操作を行った。その他にも大道具・小道具制作、衣装、卒業研究の中間発表に向けた動画制作など作業は多岐にわたり、一人何役もこなす状況であった。役割分担をしながら計画性を持って進めることが絶対的に必要であり、各係のリーダーのリーダーシップと縦横の密なコミュニケーションが求められた。中間発表と卒業研究発表は動画による発表となったが、全体をまとめつつ発表を担当したリーダーのプレゼンテーション経験も今後に活かされるであろう。これらの活動を通し、学生たちのコミュニケーション能力や企画力、対応能力が非常に向上した。また、コロナ禍という特殊な状況のもと、危機管理に対する意識も養われたのではないだろうか。

【考察】

学生たちは、１つのミュージカル作品を創り上げていく大きな目標のもと、作品を仕上げていくその過程において、企画し実行していく難しさ、大変さを体験していった。それぞれの役割を果たしつつ互いに協力し、意見を出し合ってより良い作品を創り上げる経験は、通常の授業では得難いことである。教育要領「表現」［内容］（8）には、「そのイメージの世界を十分に楽しめるように、イメージを表現するための道具や用具、素材を用意し、幼児と共に環境を構成していくことが大切である。」とある。作品のイメージを具現化にするために何が必要か考え、道具を準備し、創り上げるミュージカル制作過程は、保育現場での環境づくりに役に立つものである。日々の生活から園の行事に至るまで、保育者は常に保育の環境を整える必要がある。ミュージカル制作からは、子どもたち一人一人が自由な発想で自分自身を表現できる環境づくりや、その豊かな表現を引き出すことのできる環境を整えられる保育者への一歩となる学びを得ることができるといえよう。

また、ミュージカル制作を通して学生たちの自己表現力やコミュニケーション能力を向上させることができたと考える。ミュージカルに関する多くの先行研究でも、ミュージカル制作における教育的意義にコミュニケーション能力、自己表現力の向上が挙げられている。斎藤ら（2010）は学生への調査で、半数以上の学生が自己表現や他者とのコミュニケーションをとる

ことに苦手意識があると明らかにしている[6)]。また、長根（2004）も学生たちの能力面、人間関係面、表現面に多くの問題を抱えているとしている[7)]。そのような学生たちが、ミュージカル制作過程において多くの話し合いの中で、更に舞台での演技を通して自分の殻を破るきっかけを掴んでいる。斎藤は「ミュージカル活動が、学生に音楽的な表現力といった芸術面の学びをもたらす以上に、実に様々な意識の変容をもたらすと実感してきた。例えば、学生一人ひとりが持つ潜在能力の掘り起こし、制作過程における計画性・コミュニケーション能力、トライ精神などの獲得などの面からも、大きな効果をあげていると捉えている。」「自主性、問題を解決する力を身に着け、総合的な表現能力にも高まりが認められる。」「他者と協働する力が育まれてきている」と述べている[8)]。福井ら（1998）は、「ミュージカル教育によって高められる種々の表現力によって、高度なコミュニケーションが可能になる。それは単なる技術的な表現能力の獲得だけではない。性格の変化も伴うのである。」としている[9)]。これらの研究でも明らかなように、ミュージカル制作によって、単なる表現力だけでなく人間力の向上につながる学びができると言えよう。教育要領「表現」［内容］（3）では、「幼児が感動体験を表したり、伝えようとしたりするためには、何よりも安定した温かい人間関係の中で、表現への意欲が受け止められることが必要である。（中略）教師はそれを受容し、共感をもって受け止めることが大切である。（中略）また、教師自身にも幼稚園生活の様々な場面で幼児が心を動かされている出来事を共に感動できる感性が求められる。」とある。この様な保育者として求められる資質の育成にもミュージカル制作は教育的意義があるといえよう。

まとめ

卒業研究「ミュージカル」を総合舞台芸術と捉え、①言葉②歌唱表現③楽器演奏④身体表現⑤舞台美術⑥照明⑦演出⑧企画力・コミュニケーション能力の８つの観点を、教育要領の「表現」の領域の８つの「内容」と照らし合わせ関連性を考察してきた。各項目における「表現」の内容の抽出回数と、各項目の考察で抽出された「表現」の内容を下記に示す。

＜各項目における「表現」の内容の抽出回数＞

(1) 生活の中で様々な音、形、色、手触り、動きなどに気づいたり、感じたりするなどして楽しむ。**→１回（照明）**

(2) 生活の中で美しいものや心を動かす出来事に触れ、イメージを豊かにする。**→２回（言葉、照明）**

(3) 様々な出来事の中で、感動したことを伝え合う楽しさを味わう。**→２回（言葉、照明）**

(4) 感じたこと、考えたことなどを音や動きなどで表現したり、自由にかいたり、つくったりなどする。**→３回（楽器演奏、照明、身体表現）**

(5) いろいろな素材に親しみ、工夫して遊ぶ。**→１回（舞台美術）**

(6) 音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりする楽しさを味わう。
→2回（楽器演奏、歌唱表現）

(7) かいたり、つくったりすることを楽しみ、遊びに使ったり、飾ったりなどする。**→2回（舞台美術、照明）**

(8) 自分のイメージを動きや言葉などで表現したり、演じて遊んだりするなどの楽しさを味わう。**→5回（言葉、企画力・コミュニケーション能力、照明、演出、身体表現）**

＜各項目の考察で抽出された「表現」の内容＞

① 言葉：(2)、(3)、(8)

② 歌唱表現：(6)

③ 楽器演奏：(4)、(6)

④ 身体表現：(4)、(8)

⑤ 舞台美術：(5)、(7)

⑥ 照明：(1)、(2)、(3)、(4)、(7)、(8)

⑦ 演出：(8)

⑧ 企画力・コミュニケーション能力：(8)

以上のように、各項目における「表現」の内容の抽出回数は、(8)「自分のイメージを動きや言葉などで表現したり、演じて遊んだりするなどの楽しさを味わう。」が5回、(4)「感じたこと、考えたことなどを音や動きなどで表現したり、自由にかいたり、つくったりなどする。」が3回と多く抽出された。これは、感じたことや考えたことを言葉、音楽、身体で表現するミュージカルの特性と合致するものであると考えられる。また卒業研究「ミュージカル」において、各項目で抽出された「表現」内容は、(1)～(8)の全てが該当していることが分かった。本研究で、卒業研究「ミュージカル」は教育要領の「表現」の内容(1)～(8)の全てに該当し、保育者養成課程の表現領域における科目として、総合的で有効な教育的効果が期待できるものであることが検証できた。特に内容の(4)と(8)においては、深い学修効果が期待できることが分かった。今後の課題としては、卒業研究「ミュージカル」の言葉、歌唱表現、楽器演奏、身体表現、舞台美術、照明、演出、企画力・コミュニケーション能力の8つの観点における活動内容について、更に教育要領の「表現」の内容と関連させた効率的で効果的な指導法を検証しなければならない。

引用文献

1）福井一・太田垣学：総合的表現教科としての「ミュージカル」 奈良教育大学紀要　第47巻　第1号　（人文・社会）70頁　1998

2）磯部哲夫：「保育者養成課程における歌唱に関する研究」～女性の地声と裏声の発声法と歌唱法～

郡山女子大学紀要　第 54 集　150 頁　2018
3）磯部哲夫：「保育者養成課程における歌唱に関する研究」～女性の地声と裏声の発声法と歌唱法～郡山女子大学紀要　第 54 集　153 頁　2018
4）井中あけみ：創造性を育てる音楽表現の考察―身体表現と音楽の関わりを通して―　研究紀要［豊橋創造大学短期大学部］［編］，（28）　28 頁　2011
5）伊藤 智里，秋政 邦江，青井 則子，尾﨑 公彦，入江 慶太：総合表現（オペレッタ）における授業開発Ⅱ― 領域「言葉」「表現（身体表現・造形表現・音楽）」に関する科目内容とオペレッタ制作との関連 ―　川崎医療短期大学紀要 34 号　35 頁　2014
6）斎藤竜夫・時得紀子：協働型の表現活動の実践をめぐる考察―保育士・教員養成課程の学生への意識調査を基に培われる力に着目して―，暁星論叢，第 60 号，p.20，2010
7）長根利紀代：保育者を目指す学生への授業効果について―オペレッタを教材として―，名古屋柳城短期大学研究紀要，第 26 号，93-94 頁　2004
8）斎藤竜夫・時得紀子：前掲書，31-32 頁
9）福井一、太田垣学：総合的表現教科としての「ミュージカル」 奈良教育大学紀要　第 47 巻、 第 1 号（人文・社会）70 頁　1998

参考文献

文部科学省：幼稚園教育要領解説　平成 30 年 3 月　フレーベル館　2018
井中あけみ：創造性を育てる音楽表現の考察―身体表現と音楽の関わりを通して―　研究紀要［豊橋創造大学短期大学部］［編］，（28）　17-29 頁　2011
伊藤 智里，秋政 邦江，青井 則子，尾﨑 公彦，入江 慶太：総合表現（オペレッタ）における授業開発Ⅱ― 領域「言葉」「表現（身体表現・造形表現・音楽）」に関する科目内容とオペレッタ制作との関連 ―　川崎医療短期大学紀要 34 号　29-37 頁　2014
磯部哲夫：「保育者養成課程における歌唱に関する研究」～女性の地声と裏声の発声法と歌唱法～郡山女子大学紀要　第 54 集　147-162 頁　2018
弓削田綾乃：幼児の身体表現に関する学生の意識と実践についての一考察　浦和論叢，（41）　135-146 頁　2009
岡部裕美、冨田久枝、七澤朱音：科目横断によるミュージカル指導と公演の教育的効果― 音楽と身体の表現性を引き出す授業の取り組み ―　千葉大学教育学部研究紀要
第 66 巻　第 1 号　191-198 頁　2017
三好 優美子 渡邊 洋 長谷川 千里 柳田 憲一：総合表現（創作オペレッタ）における表現科目の連携「音楽」「造形表現」「身体表現」の観点から　東京女子体育大学・東京女子体育短期大学紀要 第 53 号 47-62 頁　2018

執筆担当

深谷：はじめに、研究の背景、舞台美術、照明、演出
磯部：歌唱表現、身体表現、まとめ
横溝：言葉、楽器演奏、企画力・コミュニケーション能力